



エコクリティシズム研究学会

NEWSLETTER No. 8 May 1, 2024

<http://www.ses-japan.org/>

— 目 次 —

エッセイ

「量子の世界とことばの世界」	1
「石牟礼道子の『春の城』」	2
「ASLE+AESS 2023 Conference に参加して」	3
会員の最新紹介	4
News & Information	4
編集後記	6

エッセイ

量子の世界とことばの世界

谷岡知美（広島工業大学）

エコクリティシズムの主なテーマは、(シェリル・グロトフェルティ(Cheryll Glotfelty) によると) 自然と言語・文学との関係であり、その目的は、人間的要素と人間以外の要素を橋渡しする理論を組み立てることである。ここにある「自然と言語・文学との関係」という一節に注目すると、「自然とは何か」が問題となってくる(人間以外を指すのだろうか?)。

いわゆる「自然」の解明を目的とした自然科学に属する「物理学」に、現在最先端と言われている「量子力学」という分野がある。量子力学とは、それまでの人間の五感で感じることのできたニュートン力学では説明できない「ミクロの世界」を対象とした、原子や分子、そしてその構成要素についての新しい理論である。量子力学は、ポール・ディラック(Paul Dirac, 1902-1984) によって、アインシュタイン(Albert Einstein, 1879-1955) による相対性理論と結合され、「素粒子」の分野を切り開いた。「量子力学」・「素粒子」は現在なお発展し続けており難しい分野であるが、その特徴の一例としては、不可分の個体、エネルギーの一つの塊、まとまっておらず、数えられる単位、粒の広がり、広がっているもの、波(波動)として動く、重ね合わせの「状態」、等があげられる。つまり、一つの粒が広がって薄くなり、どこにでもいる状態、どこにいてもおかしくない、あらゆるところに可能性のある場所がある、可能性のある場所には全ている、という実態をもつものである。「重ね合わせ」とはつまり、観測しない限り、可能性がないわけではないのである。したがって、測定の状態が対象物を変化させるといえる。まさに「摩訶不思議な世界」である。

一方で、「言語」も「摩訶不思議な世界」である。時には幸せをもたらせ、時には凶器となり、

時には人を癒し、時には人を動かす。この「摩訶不思議な」言語に関しては、日常言語に注目した 20 世紀最高の哲学者の一人であるルートヴィヒ・ウィットゲンシュタイン(Ludwig Wittgenstein, 1889-1951) の言語観(特に「言語ゲーム」の理論)が有名である。ウィットゲンシュタインは、原初的言語 (primarily language) に注目し、ことばの「使い方」(language in use) を重要視した。つまり、そのことばが話された状況、その文脈が重要となってくる。すなわち、ひとつのことばにはいくつかの意味が重なって存在し、実際の会話の中でそのことばが使われてはじめて、そのことばがおかれた文脈の中でその「意味」が確立するのである。重なり合った意味の中から特定の意味を指定し、ことばとして機能する。明確に「ある意味」と「別の意味」を分けることはできないのである。こちらのウィットゲンシュタインの哲学も、非常に難解なものとして良く知られている。

「自然」と「言語」は、一見するとかけ離れているようである。しかし、このように、量子の世界とことばの世界を重ね合わせてみると、実際は共通点があることがわかる。エコクリティシズムの理論とは少し離れてしまったかもしれないが、エコクリティシズムについてあらためて考えたとき、無限で自由な発想に立ち戻るきっかけを与えてくれると同時に、自然(人間的要素)と言語・文学(人間以外の要素)が結び付き、言語・文学の可能性は一層広がるのである。

石牟礼道子の『春の城』

横田由理

拙著『神聖な言葉の世界—北米先住民文学の「夜明け」』に取り組んでいたのと同時期に、石牟礼道子氏の『春の城』をブルース・アレンさんが英語に翻訳されているのをお手伝いする機会に恵まれた。

「島原の乱」という歴史的事実を背景に、この地に先祖的なルーツをもつ石牟礼氏が数十年という年月をかけて完成させたこの作品には、石牟礼文学の神髄が書き込まれている。石牟礼氏の代表作とされる『苦海浄土』は公害問題という社会学的視点から考察され、環境批評としても「汚染」をキーワードとして論じられることが多かったが、石牟礼作品の環境文学的な基盤はさらに深層的でかつ広大な広がりを持つものである。石牟礼氏が近代批評として論じる際、自然界との関係性がその重要な論点となるが、『春の城』という作品も自然界と人々との緊密な関係が書き込まれていく優れた環境文学でもある。

作品はまず、島原の庄屋蓮田家の長男に嫁いでいく、おかよの嫁入りが語られる。おかよは裏山の椎の実を拾いに出かけることで、去り行く故郷の自然との絆を確認する。人々の生活がいかに緊密に周囲の自然界と一体化していたかが語られており、全編を通して当時の島原・天草地方の豊かな自然の四季の詳細を知ることができる。ネイチャー・ライティングの優れた実践としての読みも可能となる鮮明な自然界の記述に満ち溢れている。

「この半島のどこそこにはまだ、昔の時間が土を割って野の花の顔をして、首をさしのべているように思えるのだ」(84)と語られるように、この地方の自然を通して共時的な時間、土地を介した重層的な時間が流れていることが分かる。「百姓たちの血汐を吸った草。その草木の生まれ変わりがこの半島を柔らかく抱きとって、今日に至っている」(76)のである。歴史に翻弄される中での自然を介した命のつながり、循環を確認することができる。引き継がれていく天草の「純朴な土地柄」は、「今の世の中が忘れていた心」であり、その「失われた日本人の魂」を書きたいと石牟礼氏は語っている(144)。

昭和四十六年、チッソ本社に座り込んだ時、原城にたてこもった人たちも同じような状況ではないかと感じたと語られるように、水俣病の犠牲者と宗教弾圧および島津藩の圧政の犠牲となった島原の人々は「深く埋没された情念と、通底しあう世界」(50)を共有する人々でもあったし、それは石牟礼氏も指摘するように、南米先住民を含めた被抑圧者たちと結びついていく。現世の辛苦に耐えパライソを目指して原城でも唱えられる「オラショ」は「黒人霊歌」と類似し、被抑圧者であるマイノリティの声全般と響き合う。

今年(2024年)1月24日、N・スコット・ママデイが家族に見守られて旅立った。ネイティヴ・アメリカン・ルネッサンスから半世紀以上経過し、ここに一つの終焉を迎えた感がある。し

かし、2019年のアメリカ図書賞を受賞したトミー・オレンジのような新しい作家たちの活躍も顕著になってきた。時の流れによる変化の中で、石牟礼文学にも通底する「継承されていくべきもの」を明らかにすることが必要であろう。それは石牟礼氏のいう「草のことづて」で伝えられるものに違いない。「白らは文字を遺さなかった者たちの思いを伝えるもの、草のことづて、空の奥に沁みついたことば」(27)である。

引用文献：『完本 春の城』 石牟礼道子、藤原書店、2017年。

ASLE+AESS 2023 Conference に参加して

浅井千晶（千里金蘭大学）

2023年7月9日から12日までオレゴン州ポートランドで開催された Reclaiming the Commons: ASLE+AESS 2023 Conference に参加しました。ASLE (the Association for Studies of Literature and Environment) と AESS (the Association for Environmental Studies and Sciences) が合同開催した大規模な大会で、全体でおよそ875人が会場、175人がオンラインで参加したそうです。会場はポートランドの中心部にある Oregon Convention Center で、今回も ASLE の事務局を担ってくださっていた Amy McIntyre さんに大会受付でお会いできて「ASLE に来た！」と気持ちが盛り上がりました。初日の基調講演は *The River Why* (1983) や *My Story as Told by Water* (2001) などの作品があるポートランド出身の作家 David James Duncan で、「Reclaiming the Commons」をテーマにした大会を始めるのにぴったりの人選でした。多数のパネルが同時進行し、映画上映やフィールドトリップなどさまざまなイベントも組み込まれているのでほんの一部しか参加できませんでしたが、2日目の午前に行われた基調講演、AESS/ASLE Joint Plenary: Elizabeth DeLoughrey and Alejandro Frid は特に印象に残りました。ポストコロニアル、人新世の文学と環境について精力的な研究を続けている DeLoughrey と、*A World for My Daughter: An Ecologist's Search for Optimism* (2015) など自らの活動に基づく作品を著している Frid の講演は互いの話が響き合うものでした。たとえば、DeLoughrey は小説 *Potiki* (1986) におけるマオリ文化を考察し、Frid は彼が実際に観察した漁師町の祭りを紹介するなど、聴衆の興味を引きつけていました。

私は第3日の7月11日に「モア・ザン・ヒューマン・エンカウンターと教育」というパネルに配置され、「Teaching a web of life through planting ‘fujibakama’ for Chestnut Tiger butterflies」というタイトルで、レイチェル・カーソンの「センス・オブ・ワンダー」と大阪のガールスカウトの一团によるアサギマダラを呼び寄せる活動を関連づけた研究発表を行いました。アサギマダラはカーソンの象徴になっているモナーク蝶（オオカバマダラ）と同様、長距離の渡りをするチョウとして知られています。このパネルは、他の発表者も大学構内の環境や四季折々の庭とヒト、教育の関係を考察する内容でした。

大会期間中に会場で、本学会顧問の Scott Slovic 先生、2019年に招聘し広島や京都で講演して下さった Ursula K. Heise 先生、2018年に愛媛大学で開催した第31回大会にシンポジウム講師として参加された台湾の Serena Chou 先生など SES-J に縁のある方々に再会することができました。揃って「伊藤先生はお元気ですか」とお尋ねになり、伊藤先生の存在の偉大さもあらためて感じました。最終日には、opening reception 同様に戸外でカジュアルに行われた closing reception の後、Heise 先生や岩政伸治先生たちと一緒にヴィーガンのレストランに繰り出し、歓談のひと時を過ごしました。



個人的には、オレゴン州在住の元同僚がポートランド空港まで迎えに来てくれ、今回滞在したポートランド州立大学ブロードウェイ寮まで送ってくれたのですが、彼の息子さん2人が同大の卒業生で同じ寮で生活したことがあるという奇遇に驚きました。オレゴン州は自然の豊かなところで、ポートランド近辺には有名なマウント・フッドに加えてコロンビア川河口に位置するコロ

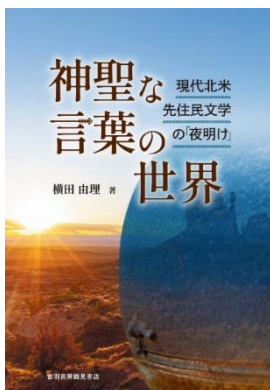


ンビア川峡谷があり、オレゴン州とワシントン州の州境になっています。コロンビア川に突き出す断崖のクラウン・ポイントからのぞむ峡谷は遠くまで見渡せる壮大な景観で、アメリカの自然のスケールの大きさを感じました。

再会をよろこび、知人・友人の厚意に感謝する久しぶりの海外出張でした。

会員の新刊紹介

2023 年度に刊行された会員の単著です。



『神聖な言葉の世界 現代北米先住民文学の「夜明け」』

横田 由理著（音羽書房鶴見書店）

発売日 2023 年 10 月 11 日

A5 判 420 ページ

定 価 3,800 円＋税

N・スコット・ママデイとレスリー・マーモン・シルコウの作品世界の検討を中心に据えて、著者の数十年にわたる現代ネイティブ・アメリカン文学研究の結実を余すところなく伝える。北米先住民自身の言葉で創作された「神聖な言葉の世界」の検討を通して、白人主流社会が作り上げた価値観や西欧文化中心になりがちな世界の再考をも促す論考の集大成。（音羽書房鶴見書店 HP より）
(<https://www.otowatsurumi.com/books/view/%20218>)

News & Information

◆◆◆◆ 2024 年度大会情報 ◆◆◆◆

第 36 回 エコクリティシズム研究学会大会

日時：2024 年 8 月 9 日（金） 10：00～17：00

場所：専修大学神田キャンパス

総合司会 日臺 晴子

10：00

開会の辞 塩田 弘 会長

- 10:05~12:00 研究発表（各発表25分、質疑10分）
 研究発表1： 10:05~10:40
 大田祐慈
 「薄暮の草原と月下の墓地」（仮）
 （司会：山本洋平 [明治大学]）
- 研究発表2： 10:45~11:20
 横田由里
 「『神聖な言葉の世界』について——北米先住民の世界と現代」
 （司会：林千恵子）
- 研究発表3： 11:25~12:00
 小杉 世
 「アマダウ・ゴージュのエッセイ・小説から気候変動と核について考察する
 ——『大いなる錯乱』と『カウントダウン』を中心に」（仮）
 （司会：菅井大地）
- 12:00~12:45 昼食
 12:45~14:45 シンポジウム
 「エコクリティシズムの過去・現在・未来」（仮）
 （司会・講師：塩田 弘、講師：五月女颯氏 [東京大学]、浅井千晶）
- 14:45~15:00 15分休憩
 15:00~16:10 特別講演
 講師：三原芳秋 氏
 [一橋大学大学院言語社会研究科 教授]
 （司会：松永京子）
- 16:20~17:00 総会
 17:00 閉会の辞 浅井千晶 副会長

◆◆◆◆ 各種委員会からのご報告 & お願い ◆◆◆◆

☆（国際）広報委員より☆

会員の出版（単著・共著）・書評・学会などの情報は、ご本人の連絡に基づき研究情報として会員にメーリングリストとHPでお知らせしますので、出版・学会については塩田 弘宛て（shiotah(*)shudo-u.ac.jp）に、書評については大野美砂宛て（misa(*)kaiyodai.ac.jp）にご連絡下さい。

☆ホームページ委員より☆

ホームページに掲載する情報がありましたら、ホームページ委員（水野、三重野）までお知らせください。また、ホームページ上の記事のご提案がありましたらお寄せください。

☆事務局より☆

●会費納入のお願い

年会費4,000円（学生会員3,000円、シニア会員2,000円）のご納入を、2024年6月末日までにお願ひします。（年会費を2年間未納の方は、会員資格を失うこととなりますので、ご注意ください。）

4月1日現在で満66才以上の方はシニア会員になることができ、会費は2,000円になります。ご希望の方は、事務局の岸野英美宛て（hkishino(*)bus.kindai.ac.jp）まで生年月日をご連絡下さい。また、ご寄附いただける場合は、その旨振込用紙の通信欄にお書きの上、どうぞよろしくお願ひいたします。ご寄附については差支えない限り、会計報告にてお名前を報告させていただきます。

●住所、所属、メールアドレスの変更届のお願い

この春、ご住所やメールアドレス・ご所属先等に変更があった方は、レヴューの発送準備等がありますので、早目に岸野英美宛て（hkishino(*)bus.kindai.ac.jp）までご連絡下さい。

.....

編 集 後 記

ご多忙の中、ご寄稿頂いた会員の皆様には厚くお礼申し上げます。おかげで、今号も充実したNLをお届けできたのではないかと考えております。エコクリティシズム研究学会は今年で30周年の記念の年を迎えますが、私は昨年度末で定年退職となりました。これまでの教員生活を振り返り、改めてエコクリティシズム研究学会とともに歩ませていただいたことに感謝しています。本学会のますますの発展を祈ってやみません。(A. M.)

気づけば令和も6年目となり、光陰如箭とも言われるように年月がまるで箭(矢)のように過ぎ去っていったように感じます。街中ではマスクを外した方が多くみられるようになり、かつての日常に戻りました。それと同時に世界経済の回復と急速な需要の拡大による物価高や、いよいよ本格的に加速し始めた国内の人手不足の問題など、刻々と変化する環境の変化に対して考えていかなければなりません。さて今号では国際学会での貴重なご報告を含めた3本のエッセイを寄せていただきました。谷岡氏の「自然」と「言語」の関係性についてのさらなる考察、昨年に出逸な単著を出版した横田氏による石牟礼作品で描かれる島原の乱における犠牲者と水俣病被害者の結び付きの語りについては大いに勉強させていただき、またカーソンのご発表で米国を訪れた浅井氏のコロンビア川の壮大なパノラマ写真には心動かされました。ご寄稿くださった先生方には心よりお礼申し上げます。(G. M)

エコクリティシズム・ニュースレター No. 8

会 長 塩田 弘 (広島修道大学)	発行日 2024年5月1日
発行元 エコクリティシズム研究学会	編 集 水野敦子 (山陽女子短期大学)
事務局 エコクリティシズム研究学会事務局	真野 剛 (海上保安大学校)
〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池 12	
愛知学院大学教養部 菅井大地 研究室	
dsugai(*)dpc.agu.ac.jp	

(スパム防止のためメールアドレスの(*)は@に変えてください。)